

桐 kiri

目白の森から風便り

目白学園 広報誌
学校法人 目白学園
目白大学大学院
目白大学
目白大学短期大学部
目白学園中学校・高等学校

第2号
通算100号
2004.3

目白学園10号館完成予想図

Special issue

目白学園10号館着工記念座談会

テーマは For the Students
新宿キャンパスの新しいシンボル
いよいよ建設スタート

目白探訪

岩槻キャンパス本館

学園インフォメーション

輝く目白の星

第48期かるた準クイーン位
競技とも関わりの深い
「自己コントロール」を研究中

人間社会学部心理カウンセリング学科3年

吉峰 翼さん





目白学園10号館着工記念座談会

テーマはFor the Student 新宿キャンパスの新しいシン いよいよ建設スタート

2003年12月、新宿キャンパスで10号館の建設がスタートしました。

地上9階・地下2階のシンボリックな姿は学園の新しい顔として、目白の台地の景観にも
ひときわ鮮やかな印象を付すものとなるでしょう。

今号はその着工を記念して、設計をお願いした野村設計から小川隆市代表取締役、
施工をお願いした大成建設から小林幸夫常務をお招きし、
佐藤弘毅理事長との座談会を行いました。

千載一遇の好機

——お忙しいなか、ご出席いただきまして
ありがとうございます。本日は、誌面で10号



学校法人目白学園 理事長 目白大学 学長
佐藤弘毅

館建設のスタートをご報告するにあたって、
新棟建設にまつわるさまざまなお話を伺っ
てまいりたいと思います。最初に、「なぜ
今10号館を建設するのか」からお聞かせ
ください。

佐藤 私たちが新しい建物を必要とする
理由には3つあります。

現在、「2000年経営改革」と称して学
園をあげての改革に取り組んでおり、大学・
大学院の拡充についても、大胆な取り組
みが果敢に、かつ速やかに進行しています。
その規模的な拡充を支える器の整備が
急務であること、それが第1の理由です。

第2は学園の中身の変容です。新宿キャ
ンパスは永く女子校として歩んできましたが、
現在、大学・大学院の拡充に伴って共学
化が進行しています。その変化に対応す
る施設・設備の整備も重要な課題です。

第3は教育研究の新しいニーズへの対

応です。IT化、あるいは学生のアメニティ
追求などさまざまな要素を実現していくた
めには、既存の設備だけでは限界がある
わけです。

しかし、そうした要求は以前から高まっ
ていたものの、新宿キャンパスでの新棟建
設の実現は非常に困難でした。首都圏の
学園は「工業等規制法」によって厳しく建
設が規制されていたからです。ところがこ
の法律が平成14年に廃止されました。私
たちはこれを千載一遇の好機として、満を
持して長年の夢の実現に向けて動き出し
たのです。

——その夢の実現をお手伝いいただく
パートナーとして、小川先生、小林常務は
今回のプロジェクトをどのようにご覧にな
りますか。

小川 我々が学園のお手伝いをさせてい
ただくようになったのは約40年前、旧第一



ts ボル



体育館の設計が最初の仕事でした。そうした経緯も踏まえ、我々はキャンパスの伝統的なイメージの発展的再生を意識しました。象徴的なのが最上階の円形のモチーフです。女王の冠をイメージして「ティアラ」と呼んでいます。新宿キャンパスに以前あった円形校舎のイメージを近未来的なデザインの中で蘇らせようという試みです。

小林 当社は先の9号館建設からのお付き合い、「今回も頼む」と声をかけていたいた時には感激いたしました。古臭い



大成建設株式会社 建築営業本部長 常務
小林幸夫氏

言い方ですが、私は“旦那と棟梁”的信頼関係があってこそ真に良い仕事ができると思っております。もちろん、前回の仕事だけで棟梁と認められたなどと考えているわけではなく、1日も早く棟梁として信頼いただけるよう精一杯やらせていただきたいと思っております。

居心地のいい創造的空间

——10号館の計画では4つの基本コンセプトとして、「1.アクティビティの見える交流の場」、「2.環境との共生」、「3.サステナブルな建築」、「4.ユニバーサルデザインをめざして」が掲げられています。それぞれについて趣旨と内容を伺わせてください。

佐藤 10号館の計画にあたって、我々は「For the Students」というテーマを提出しました。大学は教育と研究が中心的な機能ですが、同時に、学生にとってはかけがえのない生活の場でもあります。学生たちは日常的な時間の中でさまざまな出会いと交流を重ね、自分を磨いていきます。「For the Students」とは、そのための最良の場を提供しようということです。

そして、そこに直接関わっているのが4つの基本コンセプトのうちの「アクティビティの見える交流の場」です。

小川 「For the Students」、つまり学生が中心の建物という発想から考えたのが、学生のアクティビティが外からも見え、また内の学生たちが自由に触発しあうことのできる場の創出でした。そこでエントランスからロビー、2階の回廊へと連続性のある空間をデザインし、そこに展開される学生生活のさまざまな場面がそのまま学園の顔となるようにしました。また、教室や研究室があるフロアも“ゆるく閉じられた空間”を指向しました。

佐藤 教室や研究室は入口も開放的で、内にいる友人や先生の気配が廊下や別の教室からもそれとなく確認できます。 suchした空間は、家庭にいるような安心感と居心地の良さを生み出してくれると思います。

小林 私どもが最近、民間の研究施設を手がけるときによく言われるのが、大学のような無機質で閉鎖的なデザインにしないでくれ、ということです。研究施設は研究者同士の交流が創造性を生むという考え方から、オープンでゆとりのある空間の作り込みが重視されるようになっていっているのです。



その点「For the Students」の考え方は先進的ですね。

自然との共生は学園の哲学

佐藤 2つめに掲げた「環境との共生」。近年よく耳にする言葉ですが、これを盛り込んだのは時流に乗ったわけではなくて、学園の本質にかかわるものだからです。

小川 1号館の建設の時より「森の再生」が基本テーマでしたね。

佐藤 本学は“森の学園”を自負しています。創立者は樹木を愛し、自然を慈しむことを通して人間の成長を語ってこられました。その伝統は今も変わっていません。

小川 10号館の設計でいうと、まず、自然環境や景観への配慮から高さを9階までに自制し、その分、地下を2階にしました。環境負荷を軽減するために、自然エネルギーを最大限に生かす配慮もしています。地下フロアには自然の光や風をできるだけたくさん呼び込むために、地下1階にライトコートも設けました。

佐藤 南側の桜並木がそっくり残ったことも嬉しいですね。設計や工事には厳しい制約条件だったはずですが、それをきちんと残してもらったばかりか、建物と接する空間を木床のデッキとして生かしていました。ここは素敵な緑陰となるでしょう。

利用する全ての人に優しいデザイン

——「サステイナブルな建築」とはどういう意味でしょうか。

小川 「支持できる」「維持できる」という意味の英語ですが、ライフサイクルを通して、持続可能な建築を考えようとする試みです。環境への配慮と共に、将来の変化に対しても楽に行えるよう設備配管を工夫したり、

長寿命化のために制震構造を採用するなどしました。

——「ユニバーサルデザインをめざして」についてはいかがでしょうか。

佐藤 ユニバーサルデザインとは、健常者や障害者、高齢者や子ども、外国人など、誰もが等しく便利に使えるデザインという意味です。近年そうした概念が重視されるのは、我々の社会が成熟した証であり素晴らしいことです。幸運にも我々はそうした時代に生きているのですから、新しい建物にはユニバーサルデザインの価値観を積極的に取り入れることをめざしたのです。

小川 現在、公共的な建物にはバリアフリーの基準が定められていますが、学園の要望はそれを大きく越えるものでした。たとえば多目的トイレを全フロアに設置しようとなさる。我々の常識からいうと破格の要求です。

佐藤 ユニバーサルデザインでは、案内表示も重要な要素です。サインシステムと言いますが、館内の情報を誰にでも分かりやすく伝えるにはどうしたらいいのか。そこでも我々は知恵を絞りました。

壮大なコラボレーション

——コンセプトの策定は、建築委員会の全学的な議論を中心に行われました。佐藤理事長はこのプロセスを重視されたそうですね。

佐藤 私たちは今、長年の夢を実現する千載一遇の好機を得ました。委員会を呼びかけたのは、これを全学で共有するためです。財政的な制限はあるにしても、まずは全員で夢を語り合ってもらいたかったのです。

小川 議論からは実にさまざまご要望が生まれました。それを設計に反映する

のには苦労しましたが、このプロセスを踏むことで、10号館は学園の哲学をしっかりと踏まえたものに仕上がったと、我々も自負しております。

佐藤 我々が夢の議論に時間をかけた分、皆さんにはご迷惑をかけてしまいました。

小林 いえいえ。議論が学園の気持ちを一つにしたはずです。それは完成した建物を永く使っていただくためにも大事なことだと思います。また、徹底した議論で基本コンセプトが明確になっているのですから、あとは手筈通りにことを運ぶだけです。工事も効率的にスムーズに進めることができるでしょう。

佐藤 そう言っていただけるとありがたいですね。我々が紡ぎだした夢が、専門家の手を経て現実の建物として完成する。そして、その建物が我々の手に戻って教育、研究の新しい夢を紡ぎだす場となっていく。そう考えると、これは施主である学園と設計者、建設者という三者の実に息の長い夢のある共同作業、コラボレーションと言えます。この壮大な事業を成功させるために、共にベストを尽くしましょう。



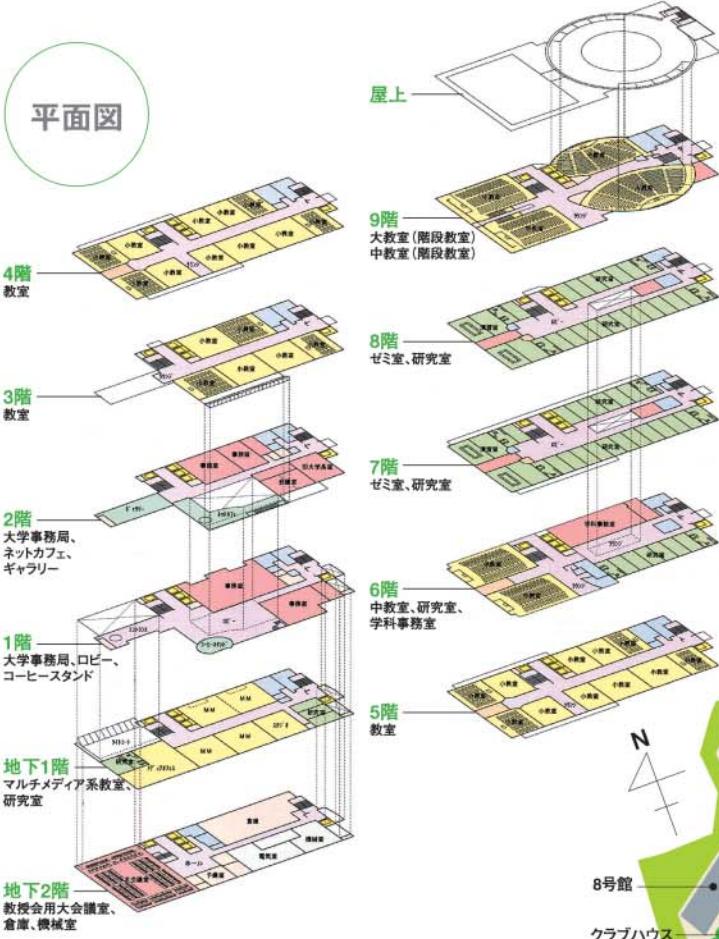
株式会社野村設計 代表取締役
小川隆市氏



10号館基本計画図面



▲10号館完成予想図 [2005年3月 完成予定]



2階事務室側から臨む1階ロビー

1階エントランスホールから連続したロビー空間にはコーヒースタンドが設けられ、オープンな階段が上階のネットカフェとつながり、立体的に活発な交流の場となっています。



オープンテラス

1階のコーヒーショップは窓を開けるとオープンテラスとなります。外の桜並木は全て残し、ウッドデッキのある快適な緑陰スペースが提供されています。



目白 探訪

第2回 岩槻キャンパス本館

キャンパスの訪問者に鮮やかな印象を彫みつけずにはおかしい建築物、それが本館です。大きく開放的なゲートをくぐって漏れてくる中庭の眩しい光線が、その向こうにある豊かなキャンバス空間を予感させます。建物の主な機能は研究棟で、2・3階には研究室が両側に並んでいます。学内の知の拠点であり、外界の日常空間と、豊かな学びの空間を仕切る、“知のゲート”でもあります。「彩の国景観賞」に選ばれた目白大学岩槻キャンパスの設計コンセプトを凝縮した大学の顔です。



玄関ホール

学外からのお客様をお迎えする正面玄関。岩槻市から寄贈された人形、埼玉県から受賞した「彩の国景観賞」の楯、国際交流提携校の一つ韓瑞大학교寄贈の壇などが重厚なホールに彩りを添えています。



太陽光発電システム

屋上には、一面を覆いつくすように約500枚のソーラーパネルが並んでいます。平成6年当時に導入されたシステムで、大学では初の試み。規模の大きさも合わせて、環境との共生を重視する本学の姿勢を象徴し、設置時には学外からも高い関心が寄せられました。



大会議室

本館4階には、学部長室のほか大、中、小会議室が設置されており、大会議室は、定期的に行われている教授会にも使用されています。大会議室の窓からは岩槻キャンパスの中庭が一望できます。



研究室

2階・3階には研究室が廊下の両側に並んでいます。2台の研究用デスクと打合せ用デスク、書棚が完備されたゆとりある室内は、卒業研究指導やゼミ活動の場としても活用されています。



Iwatsuki Campus Map



学部ラウンジ

東側に連続して建つ教室棟(1号館)と本館の接する場所に設けられています。授業を控えた教員の憩いの場であり、学生にとってはレポートなどの提出窓口、教員との気軽な交流の場として利用されています。



事務局

東側半分の1階部分には事務局があります。局長室、学生課、教務課、入試課の機能が集約されているほか、学生の健康管理をサポートする保健室が設置されています。

学園インフォメーション

自白学園創立80周年記念広告として、

読売新聞紙上に卒業生紹介記事がシリーズ掲載
昨年末、読売新聞紙上で、「昇っていく人には夢がある」という統一テーマで、現在活躍中の本学卒業生が4回シリーズで紹介された。内容は次の通り。

第1回 11月29日(土)

シンガーソングライター 熊木杏里さん
(短期大学部言語表現学科卒業)

第2回 12月7日(日)

絵師 林直輝さん
(人文学部地域文化学科卒業)

第3回 12月16日(火)

NFLチアリーダー 安田愛さん
(自白学園高等学校、自白学園女子短期大学=現・自白大学短期大学部英語英文科卒業)

第4回 12月22日(月)

ガラス工芸作家 藤田喬平さん
(自白商業学校=現・自白学園高等学校卒業)

中学校・高校

2003.12.6

自白学園ホームページ開催

自白学園高校を卒業して15年・25年・35年経つ卒業生を本学園に迎え、恩師や級友たちと旧交が温められた。当日はお天気にも恵まれ、約50名の卒業生と30名の元・現教職員が一同に会し、和やかな時間を過ごした。懐かしい再会に涙する場面も見られ、「良い機会を作ってくださいて、本当に有り難い。これからも続けてほしい」と、参加者からは異

口同音の感想が聞かれた。

この催しは今後も実施する予定。卒業生の皆様のさらなる参加を期待している。



2003.12.19 藤田喬平氏講演会実施

自白学園の前身、自白商業学校を卒業した藤田喬平氏による、自白学園創立80周年記念講演会が、佐藤重遠記念講堂で行われた。藤田氏は、平成14年に文化勲章を受賞したガラス工芸作家で、色ガラスに金箔を混ぜた「飾笛(かざりばこ)」で世界的な活躍をされている。講演会では、全中高生、学園関係者、保護者を前に「ガラス一筋の人生」が分かり易い口調で語られた。

講演を記念して、学園に自作の飾笛が寄贈された。

2003.12.19

吹奏楽部第11回定期演奏会開催

佐藤重遠記念講堂で、吹奏楽部第11回定期演奏会が開かれた。8月の都吹奏楽コンクールで銀賞を受賞し、上昇気流に乗る同部は、この日、第1部ステージドリル、第2部オリジナルの構成で日頃の練習の成果を披露。演奏プログラムは次の通り。

第1部 FIESTA／MEET THE FLINTSTONES／LATIN CADENCES／YOUR SONG

第2部 Chant and Jubilo (W.Francis McBeth)／古典幻想曲(伊藤康英)／BUDAPEST Impressions (Roland Kernan)



2004.1.29 百人一首大会開催

第二体育館でカルタ大会が開催され、中学生全員約170名と人間社会学部3年の吉峰翼さんが特別参加した。吉峰さんは2004年準グランプリに輝く、競技かるたのトップ選手。その鮮やかなプレーに生徒たちの憧れの視線が集中。会場は終始、熱気に包まれた。



大学・短大・大学院

2003.12.14／2004.1.12

入学予定者事前研修実施

岩槻キャンパスではAO入試で合格となった入学予定者に対して事前研修が行われた。早期に入試を終えた高校生の勉学への意欲を喚起し、あわせて大学教育への導入を円滑化するのが目的で、実施内容は大学の授業概要の解説、先輩在学生との懇談、提出課題の説明など。

2004.1.29 玄さん、李さん帰国

新宿キャンパスで初めての受け入れとなつた、韓国からの交換留学生2名(湖南大學校:玄英美さん、韓瑞大學校:李姫淑さん)が1年間の留学期間を終えて帰国した。

韓国の大学校では日本語を専攻してはいたものの、来日した当初は授業についていくのがやっとだったという。しかし3ヶ月ほど経つと日本語にも慣れ、アルバイトもできるほどに上達した。二人は学内外で多くのことを学び、「自白大学で経験したことは友達に自慢できる」と話してくれた。



学園 トピックス

2005年、新宿キャンパスに 新学部誕生!(設置構想中)

【外国語学部】 ●英米語学科 ●アジア語学科
・中国語専攻
・韓国語専攻
・日本語教育専攻

—自白大学外国語学部の開設を構想しています—

科学技術の高度な発達と地球的規模での産業構造の進展に伴い、世界中の国境が薄れてきています。日本でもたくさんの外国人が生活をし、そしてまた、多くの日本人が活躍の場を求めて世界に進出しています。外国語学部では、実用に耐える語学能力を習得するだけでなく、変貌を続ける世界の諸問題に、国際的観点から対応できる人材の育成を目指します。

キーワードは、「国際理解教育」と「外国語教育」。自白大学の新学部としてスタートします。

新宿区の小・中学校で メンタルサポートボランティア活動

2月19日(木)、新宿キャンパスボーラームにて、新宿区教育委員会との「メンタルサポートボランティア制度」に関する協定書の調印、交換が執り行われました。

この制度は、自白大学人間社会学部心理カウンセリング学科の学生と大学院心理学研究科の院生を新宿区教育委員会に派遣し、新宿区内の小・中学校でボランティア活動を行います。学生・院生は広く児童・生徒と関わり、理解を深めようとする実体験を通して、学校におけるメンタルサポートの意義とその役割を考える機会を得ると同時に、小・中学校の教育活動の充実に貢献することができます。



新宿区教育委員会委員長 山崎輝雄氏と佐藤理事長

夢の「かるたクイーン位」に初挑戦

2004年1月10日、近江神宮で開催された第48期かるたクイーン位決定戦の挑戦者席で、吉峰翼さんは静かな闘志を燃やしていました。ここに至るまで東日本予選トーナメントに優勝し、挑戦者決定戦で西日本代表者を敗るという長く険しい戦いを制してきたのです。吉峰さんは8度目のチャレンジで、この大舞台に上る権利を初めて獲得しました。挑戦相手は荒川裕理クイーン。包み隠さぬ気迫と粘り強さが持ち味です。対する吉峰さんは天性の鮮やかなスピードを武器に善戦しましたが、惜しくも敗れてしましました。

かるた遊びには正月の風物詩としてののどかなイメージがありますが、競技かるたはまったくの別世界。素早く反応し、時に相手とぶつかり合いながらをはじき飛ばす激しさと、自陣・敵陣間の札の送り合いを巡る緻密な戦略性が求められるハードで奥深い競技なのです。選手たちは膝にサポーターを付けて試合に臨み、衣装が擦り切れたり突き指をしたりなどは日常茶飯事といいます。

中学1年という当時としては異例の若さで4段になった吉峰さんは、週に2~4回の厳しい練習に励みトップ選手として活躍を続けてきました。出場試合は年間20試合以上。全日本選抜、全日本選手権などのビッグタイトルでの優勝経験も少なくありません。今年、クイーン位には手は届かなかつたものの、準ク

イーン位のタイトルがトップ選手の実力を証明して余りあることは言うまでもありません。

昨日のライバルが応援者に

吉峰さんは現在、本学心理カウンセリング学科の3年生。心理学に興味をもったのは高校2年生の時の体験がきっかけでした。

この年、彼女はクイーン位挑戦者決定トーナ

メントを順調に勝ち進み、東日本代表になりました。西日本代表に勝てば、いよいよクイーン戦の大舞台です。コンディションは申し分なく、このままいけばクイーン位獲得も間違いないと誰もが確信していた矢先、練習中に右手人差し指を骨折してしまったのです。

「この経験で世界観が180度変わりました。1週間後に右手を体に固定して左手で練習を再開したのですが、利き手ではないので思うように動きません。そのときこれまでライバルだった皆が応援してくれ、どうすれば上手に取れるか一緒にになって考えてくださいました」

この体験を通して吉峰さんは周りの人々に感謝するとともに、援助する側される側双方の心の問題に興味をもつようになつたそうです。

「大学ではさまざまな臨床事例を学ぶことができました。どれも深刻な問題なので面白いという言い方は適當ではありませんが、とても興味深く学習しています」

現在の彼女のテーマは、スポーツ心理学と自律訓練法。競技中の自己コントロールとも密接に関わるテーマです。

「今年は卒論の年です。提出期限は12月ですが、クイーン戦のトーナメントは10月に始まるので、夏休み明けぐらいまでには完成させたいと思っています」

吉峰さんの2004年は大学生活、競技生活とともに充実した1年になりそうです。

輝く目白の星

第48期かるた準クイーン位
競技とも関わりの深い
「自己コントロール」を研究中

人間社会学部心理カウンセリング学科3年
吉峰 翼さん